校長室だより～燦燦～ №７２８

授業が変わる

2023.3.31

今年度の野田中学校では、１人２回以上の研究授業を実施した。多い先生は５回行っている。学年４クラスあるため、簡単に言えば同じ授業を４回やることになる。あるクラスでうまくいかなかったとする。うまくいかなかった原因を考え、次のクラスでは、それを改善しようとするのではなかろうか。

最初のクラスでの１回目の研究授業が終わる。事後の協議会で、次のクラスでの２回目の研究授業では、こうしたほうがいいのではないかという話し合いを行う。授業者は、アドバイスをもとに、２回目の研究授業を行う。事後の協議会では、１回目と比べて２回目はどうだったのかという話し合いをする。１回目、２回目ともに協議内容が絞り込まれ、わかりやすくなる。

このような方法をとると、授業者自身が、自分の授業が変わったという実感をもつことができる。授業を改善するという経験ができる。授業を改善するというのはこういうことかと理解できる。すなわち授業を改善することができる。

ただし、この後が重要である。せっかく授業を変えるきっかけをつかんだのに、定位置に戻ってしまうのである。多くの先生方には、授業の定位置があるように思う。研究授業を行う。手だてを講じた結果、いつもよりもうまくいく。ところが、元の授業に戻ってしまう。有効に働いた手だてを使うことをしなくなる。他の先生の授業を参観する。同じように自分でもやってみる。今までよりもうまくいく。けれども、元の授業に戻ってしまう。実践発表を聞く。「よし、自分でもやってみよう」と思い、やってみる。うまくいく。だが、元の授業に戻ってしまう。

こんなことが多くはないだろうか。やり続けるということをしない。うまくいくのは、それだけエネルギーを使って、それなりの準備をし、方向性も間違ってはいないからである。問題になるのは、元の授業である。研究授業では存在していたはずの学習課題が、黒板から消えている。課題がない授業は、たいていまとめもない。振り返りの時間が確保されることもない。研究授業では行われたグループ活動がなくなり、一方的な講義形式で、授業の形態は一斉のみであったらどうだろうか。たちまち、教室中が停滞感に覆われる。研究授業では、十分に確保されていた自力解決が２分だとしたらどうだろうか。生徒は、じっくり考えることなどできなくなる。考えたことを書くこともできない。

定位置に戻ってはいけない。そうしないと、研究授業は打ち上げ花火になってしまう。いいと思ったことを自分の授業に取り入れる。うまくいったら、やり続ける。すると、授業の定位置が定位置ではなくなる。定位置のレベルが上がっていく。そうやって少しずつ授業が変わっていく。いつの間にか、授業の引き出しが増えていく。引き出しが多い、これすなわち魅力的な授業につながる。

よく日々の授業というが、重い意味の言葉である。“授業を変える”から“授業が変わる”までもっていくのは、並大抵のことではない。だが、やるべきことであり、やりがいのあることである。これからも授業が変わるまで歩み続けたい。